

俳句にカワイイを(番外編)

高橋真紀子

突然だが、滑稽俳句の作品には、下ネタやエッチなものを詠んだものが多い。もちろん、エロや下の話だって、小説を始めとした文芸のテーマになる。先日、書店の俳句コーナーで「エロチシズム」というタイトルの本を見つけたが、有名な現代俳人たちも結構詠んでいることが分かった。

ただ、下ネタやエロを、笑いを誘うように詠むのは相当難しい。そのまま、生々しく五七五で写生しただけなら、一部のコア読者を除き、ただのエロとして失笑を買うだけだろう。

ネタがネタだけに、万人受けするのはそもそも無理かもしれないが、少なくとも原点には立つべきなのだろう。そこに詩はあるのか、と。

夏目漱石や正岡子規の句集を開くと、意外にも「糞」の滑稽句が目につく。

例えば、漱石の場合。

菜の花の中に糞ひる飛脚哉

春日野は牛の糞まで焼てけり

子規は、

初午や土手は行来の馬の糞

馬糞をはなれて石に秋の蠅

馬糞に息つく秋の胡蝶かな

現代では見ることも難しい、野中に犬猫以外の「糞」のある風景。また、蠅が糞にたかるとは限らず、美しい蝶だって糞に止まることもある、驚きの発見。漱石や子規の句には、そんな可笑しみを含んだ詩心が見える。(どう言ったところで「糞」に嫌悪感のある方には説得力はないだろうが)

もともと、文豪や近代俳句の父のような芸当は、簡単にはできない。そこで、おすすめしたいのが「カワイイ」だ。この場合、「エロカワイイ系」滑稽句とでも言おうか。

「平成の滑稽」(本阿弥書店)にお手本がある。

逃水は神のお洩らしかも知れぬ (八木健)

蟬殻をぬぎつつあればセミヌード (八木健)

一線を軽く飛び越え猫の恋 (前川敏夫)

春寒し英世と一葉駆け落ちす（岩村加寿夫）

風の日は接吻ごっこチューリップ（田代青山）

美少女の胸を独占愛の羽根（三木蒼生）

エロカワイイ描写は、生々しさを緩和しながら、あるいは打ち消して、軽い笑いを誘う。詠む人は眉をひそめる前に、まずクスッとくるだろう。そうしたらしめたものだ。

実は「拙句」にも一つだけ、エロカワイイ系がある。

完熟の桃のおしりの皮をむく

まるまると玉太りした桃の皮を手でむきながら、ふと、プリっとした赤ちゃんのおしりを想像して詠んだ。ただ、作者の意図に反して、大人の女性のお尻を想像されてしまうらしい。（「完熟」という言葉のせいかもしれない）

オンナのおしりか、それとも、赤ちゃんか。どう受け取られるかは私にとっては大きな問題だ。オンナなら、エロカワイイでなく、ただのエロ系になるから。

（完）